

## 芦屋市指定文化財（親王寺所蔵考古資料一括）について

### 1 指定区分

芦屋市指定有形文化財

### 2 指定年月日

平成2年3月22日

### 3 名称（よみ）

親王寺所蔵考古資料一括（しんのうじこうこしりょういっかつ）

### 4 員数

(1) 銅鐸 1口

(2) 銅鏡 4面

①連弧文鏡

②三角縁神獸鏡（三角縁波紋帯三神二獸博山炉鏡）

③三角縁神獸鏡（三角縁波紋体神獸鏡・破片）

④三角縁神獸鏡（破片）

(3) 石帯 5点

### 5 所有者

阿保山親王寺

### 6 所在地

阿保山親王寺（芦屋市打出町3番21号）

### 7 年代

(1) 弥生時代中期

(2)① 後漢時代（1世紀）

②～④ 古墳時代前期

(3) 平安時代

### 8 概要

芦屋市打出町にある阿保山親王寺は、平城天皇の第一皇子である阿保親王の菩提寺と伝えられています。芦屋市翠ヶ丘町には阿保親王の陵墓とされる阿保親王塚古墳（古墳時代前期・4世紀）がありますが、江戸時代には、阿保親王を祖先と仰ぐ長州藩（山口県）毛利家が古墳の大改修を行っており、その際に出土したとされる考古資料が親王寺の寺宝となっており、これらを「親王寺所蔵考古資料一括」として指定しています。

#### (1) 銅鐸

かつては元禄4年（1691）の阿保親王塚古墳の周濠修築の際に発見されたものと伝えられていたが、毛利家文書（山口県文書館所蔵）の『阿保親王御廟詮議』において、銅鐸を描いた図

とともに「銅鐸之図 堂ノ上ト云処ヨリ堀出ス宝永年間之事ナリ」の記述が確認されています。さらに、毛利家文書の『兵庫親王寺銅鐸之図』には「宝永三年戊三月中旬ヨリ」の記述があったことから、宝永3年(1706)に堂ノ上(現在の楠町付近)で出土したことが明らかになりました。

銅鐸は外縁付鈕2式流水文銅鐸です。総高45.3cm、身の高さ32.2cm、底径24.0cm(長径)×16.6cm(短径)の大きさで、重量は4.7kgです。鈕は最外縁部を内行鋸歯文で飾り、その内側を綾杉文で連ね、さらに内縁部は連続渦巻文を配している。鈕の文様帯は、中央部には綾杉文帯をおかず、双様渦巻文で埋め、下端には三日月状の区画が設けられて、内部には外行鋸歯文が5.5単位みられます。鐸身の流水文は5条線で、下段には2条の平行線を配した連続する上行鋸歯文が飾られます。身の両側の鱗は幅2.2cmを計り、太い4条の平行線を伴った3対の双耳を飾り、その間に内行鋸歯文をおきます。鐸身上部に楕円形の型持ちの孔2つと下部縁端にも同様の孔が半楕円形で存在する。内面突帯は下端より3.7cmのところのみられます。

## (2) 銅鏡

いずれも阿保親王塚古墳から出土したものです。

### ①連弧文鏡

面径16.3cm、重量は533gです。四葉座Ⅲ式に分類される鏡で、中国で後漢時代に作られたものです。四葉文の間に「子」「孫」の文字が確認でき、「長宣子孫」の銘をもっていると推測されます。

### ②～④三角縁神獸鏡

①は完形品で、面径21.5cm、重量は782gです。広島県掛迫古墳や奈良県佐味田宝塚古墳で同範鏡が確認されています。

## (3) 石帯

古代の役人が身につける石製の飾りが付いた腰帯(銚帯)です。表面を飾る半円形のを丸軛、方形のを巡方、先端に取り付けるものを鉞尾と呼び、石製丸軛2点、石製巡方2点、石製鉞尾1点が所蔵されています。『阿保親王御廟詮議』では、石帯を描いた図とともに「石帯ノ石ノ図 鼠色ニシテモクメ有之 図ノ如キ玉ツイハ水浅黄ナリ 其数五ツ 御廟ノ傍ニ小塚四ツ有之 其中ヨリ堀出之宝永年間ノ事ナリ」と記されています。阿保親王塚古墳の東側には「四ツ塚」と呼ばれる4つの塚があったようで、これらの石帯はそのいずれかから出土したものです。

## 参考文献

加藤一郎・土屋隆史・的場匠平 2019 「阿保親王墓墳丘外形調査および出土品調査報告」『書陵部紀要』第70号〔陵墓篇〕 宮内庁書陵部

武藤 誠・有坂隆道・末中哲夫・村川行弘 編 1971 『新修芦屋市史』本篇 芦屋市役所

武藤 誠・有坂隆道・末中哲夫・村川行弘 編 1976 『新修芦屋市史』資料篇1 芦屋市役所